

三つやの老

應身の卷

大御親と共に住す……………	一
起信論……………	七
釋迦を通しての彌陀……………	三
三相と明淨鏡……………	三
三相五心の古師の判釋……………	元
三昧の解……………	三
諸根悅豫……………	三
機體の鍛練……………	四
我等いかにして三相を成就せん…	咒

大御親と共に住す

吾人が瞻仰する所の大宇宙を通じて全體是れ吾人が仰ぐ所の大御親の身心に在ませり。宇宙全體が如來の御身に於てまた如來の精神に在ます。吾人は宇宙全體を通じて絶對的なる如來を信ぜざるを得ず。全體が身にしてまた如來心なり。全體が如來心なるが故に宇宙は如來の大智慧光明の至らざる所はなし。また如來大威神力の存在せざる所なし。吾人が見る所の天地萬物日月星辰一切萬有も悉く如來心身の現象ならざるはなし。如來の本態は一體にして而も一切なり。實に不可思議にして不可思議なるものは如來

に在ませり。自然界の萬有も如來心を離れて有ることなし。一切の動植物いかに微少なるも如來心を離れては存することなし。微少なるものは微にして亦不可思議なり。宇宙の大なるは大にして亦不可思議なり。宇宙は如來心靈態の故に實に深玄なり。吾人が肉眼を以て視る處のものは或る一方面に過ぎず。若し心眼を開きて見る時は此處が即ち常寂光土なり。宇宙を盡して蓮華藏世界を現す。これ重々無盡の妙色莊嚴界なり。また大日自性法界宮なり。大毘盧舍那如來無量の法身の菩薩の爲めに常恒に說法し給へり。此處が即ち西方極樂世界なり。彌陀如來常に法輪を轉じ給ふ處なり。大日と云ひ彌陀と云ひ唯一の大御親の異名に過ぎず。教祖釋迦牟尼また大御親の應化身なり。娑婆に垂れたる迹は小なれども其の内證の本地は法身無量光なり。無始無終の本佛なり。實に不可思議にして不可思議なる大御親の御權態なり。我等斯の大御親を知らずして六道に輪廻せり。

宇宙は全體娑婆世界にして而もまた常寂光明土なり。娑婆即ち衆生界も無邊なれば佛界もまた無際なり。生死界も無盡なるが故に涅槃界もまた無盡なり。宇宙は如來太心界なれば一塵の色相あることなし。また宇宙は如來大心の妙境界なれば十方三世に亘りて重々無盡の佛身佛土の莊嚴ならざる處なし。愚童の吾等さへも慧眼を以て觀する時は十方を盡して一塵もなし。若しまた法眼を

以て視れば十方に勝妙五塵の色相なる味觸の妙境莊嚴ならざるはなし。

吾人は金剛經が色相を以て佛を見るの非なるを呵責するの眞理なるを諦信すると共に淨土經に説く處の勝妙五塵の淨土の莊嚴の眞實なることを確信す。是二經の所説相互に映して大御親の眞空妙有の妙を示し給へり。若し單に一方のみに偏依する如きは未だ大御親を全く信じ能はざるものなり。實に如來大心の眞實不可思議を悟らざるものは空と云はゞ空に墮し有と云はゞ有に偏す。これ如來眞空妙有の眞理を會得すること能はざるものなり。

大御親の聖意の現れたる清淨佛土は法界に周徧すれども衆生自ら知らず。唯穢惡充滿の娑婆とのみ感ず。

若し大御親の光明に靈化する時は如來自性の境界たる靈妙不思議の清淨界を感じすることを得ん。宇宙は實に甚深なり。

吾人の精神亦不思議なり。是大御親の分子なり。分子開發すれば全體と合一す。靈性開發する時は大御親と共に清淨國土に安住することを得ん。靈界を實驗することを得ん。

如來は全體一大心靈として法界に周徧しまた妙色莊嚴の佛身佛土として法界に充滿す。若し此の説を聞いて疑はざるものは如來の眞理を諒解したる者なり。此れ眞實なり。慧眼を開きて實驗せられよ。吾人は大御親と共に行住坐臥に離ること能はず。

五

起信論

聽書

(8)

眞如

—— 依言

—— 絶言 —— 今は絶言眞如

一切言説假名無實とは明言教非實不可言取

但隨妄念等とは釋成無實所以恐諸凡愚聞上眞如名則謂論主自語相違上文既云離名字相何故復立此眞如名故今釋遣假名非實不相違也。

故眞如言とは眞如名是假名にして非實名應レ知

不可得とは凡諸有の相皆是虛妄云々言無相者遮有相言耳論其實亡四句絶百非

亦言無相者遣於相也良以名依相立俱是偏計所緣故楞伽經云相名常相隨生諸妄相故今雙遣也。

七

言説、極、既、絶、名、相、但、假、立、客、名、何、故、不、立、餘、名、唯、云、真、如、耶、釋、云、真、如、
は、言、説、之、極、な、り。謂、く、此、名、の、後、更、に、無、有、名、則、諸、名、中、最、後、邊、際、な、り。
故、に、攝、論、中、十、種、名、内、に、真、如、名、是、第、十、究、竟、の、名、故、に、云、極、也。

攝論十八終十種名

法名——色受等眼耳等

人名——信了法了等

法名——修多羅祇夜等

義名——十二部經所顯諸義名

性名——無義文字

異名——衆生等通名

廣名——衆生各有別名

不淨名——凡夫等

淨名——聖人等

究竟名——一切法真如等

因言遣言とは言語に云はれないと云ふ事。立此極名爲遣名若無此名
無以遣名若存此名亦不遣名如打靜聲若此聲無則不止餘聲若爲存此
聲數々打靜即自喧故亦非止聲當知此中意趣亦爾善須消息

維摩經に不二の法門を談ずるとき十二人の僧各不二の法門色心不二
終に文殊菩薩無言無説と云ふ。維摩よ貴君は如何と問へば默然たり。

無有可遣とは絶對故に遣るべきこともなし。又無くする方もなし。

此に二釋あり。一に約觀釋して云く外人見前文雙遣真如名相謂真如本體
亦是可遣之法則生斷見故今釋云但遣虛妄名相不遣真如實法以是妙智
觀境故何以不遣下句釋云以一切法悉皆真故無法可遣也外人既聞真
理不遣則謂有法可立常情緣執故云亦無可立以離妄情故何以不立

者下、句釋顯可知二約法釋云、無可遣者非以真如體遣生滅法也。
何以不遣者釋云以一切法悉皆真故以生滅門中一切染淨等法即無自性
不異真如故不待遣也。

皆真とは離偽妄也亦真如の眞の字を釋す

亦無可立とは更に立つべき事なし。本來立つて居るから理窟より立
つべき更になし。(新佛經に本來有無の義を立て形は無くなつても體
はあるとか、靈魂不滅とか、何とか、種々に立つ。註に既に諸の生
滅等の法未會不真故此真如不待立何以不待立下句釋云以一切法皆同
如故以一切生滅等法本來同如故此真如未會不顯更何所立又准上文二
門皆各總攝一切法言比中應成四句。

一約真無所遣以俗即真故。二約真不待立即俗之真本現故。三約俗無
所乖(真若乖俗立其俗時即可遣真然真即俗故中無可遣者)以真即俗故。
四約俗不待立即真之俗差別故由是義故不壞生滅門說真如門不壞真如
門說生滅門良以二門唯一心故是故真俗雙融無障礙此四句中前二句在
真如門後二句在生滅門以此中是真如門故但有二句真俗雙融無礙者不
壞生滅而即混故生滅即真如而不礙生滅不壞真如而即隱故真如即生滅
而不礙真如是故真生融攝體無二也問若爾二門俱齊云何復說生真有耶
答義門別故真生恒殊法體遍通故全是無二何者謂生滅起必一向賴於真
是故真々不失真如顯未必一向藉於生滅故混生滅々々不立是故生滅即
真如雖具存壞竟必有盡真如即生滅雖具隱顯終恒無盡一生滅即真如故
不待壞二生滅即真如故不礙存三生滅即真如故無不壞四生滅即真如故
無可存又一真如即生滅故不待隱二真如即生滅故不礙顯三真如即生滅
故無不隱四真如即生滅故無可顯

不可念とは所詮絶慮なり妄念分別の心なし。
衆生等

一一一

隨順とは下本三十一メ若能觀察知心無念即得隨順入眞如門故同廿五メ隨
順得入眞如三昧深伏煩惱信心增長

若離於念とは下末三十五メ云伏煩惱信心增長速成不退
即信滿入住名爲得入心眞如は一大觀念中に自ら契合するのみ。是を得入といふ。

觀智の證入は一大觀念にして純粹なる心理形式也。

禪門には父母未生前の心（此の父母は無明の迷の父母にして形の父母に非ず）

釋迦を通じての彌陀

釋尊は哲人なると共に大宗教育家である。今大宗教育家として

釋迦は無量壽經の説き玉ひし衆生を彌陀に歸せしむる佛陀。彌陀を以て一切諸佛の最尊とす。釋尊は諸佛と共に彌陀を稱揚讚歎し玉ふ。彌陀は一切諸佛の本佛とし一切衆生の攝化主なれば大經に一切衆生が彌陀に歸命信賴すべきを教へ玉へるは是大宗教育家としての釋尊なり。有人曰く彌陀は釋尊已前に印度古代より宗教的本尊として尊崇し來りし毘紐拏尊の如きの神にあらすや。然して釋尊は從來の宗教の對象なる神を排斥して完全圓滿に聖徳の發輝

一一三

したる佛陀自身が神にして夫已外の神を立てざるのが佛教ならずやと。今曰く其説の如きは唯小乗教の説にして大乘の教説にあらす。

一一四

小乗教は實に然る最靈最聖の佛陀が即ち神尊にして此外に神を立てず。今宗教として大乘佛敎は小乗敎の人佛（現身佛）のみを立て法身佛を立てざるの偏計を破りて宗教としても完全なる眞理を現はせり。釋尊已前の印度敎は天佛（神）のみを説いて神を代表する人格を立てず。又、小乗敎は人格の神のみを立て人格神の本地本佛を顯はさず。若し實に天に絶對界に圓滿なる大威神大慈悲なる神格が在ますならば。必ず此現世界に跡を垂れ玉うて人格の出現なかるべからず。然るに印度敎にては最尊最威の神を説けるも其神格を代表せる人格の未だ出でず、故に絶對界の神格の紹介者なし。是程の世界的の大人格なきは是缺點なり。次に小乗敎にては人格を以て神格を代表せる人佛は出玉へども其本佛は絶對界の大神格なることを示さず。故に兩敎は如來の本迹二身の半面のみを分説して圓滿なる了敎にあらす。圓滿なる大乘佛敎のみ完全に兩面を明かにす。即ち絶對の靈界にありては無量光と曰ひ現實界に分身示現しては釋迦と云ふ。是甲は本佛、乙は垂迹佛なり。故に西藏佛敎には彌陀は禪定佛とし釋迦を人佛とす。絶對界なる禪定佛彌陀が三昧定中より人佛釋迦を示現して現實界の衆生を教

一一五

へて彌陀の大慈悲に歸命信願せしむ。故に釋迦は彌陀より分身の示現にして彌陀は釋迦の本佛なりと。佛陀已前の印度教に於て信じたる天の神格と、大乘佛敎の釋迦を通じての大神格なる彌陀とは其本體に於ては或は同一なるにもせよ其に對する神格的觀念の形容に於て同じからず。例へば基督已前の猶太敎の天の神と。基督を通じての神とは同一の神としても已前の戒律を以て人を審判する正義の神と基督が父と呼びたる愛の神とは内容に於て異なるが如し。釋迦已前の婆羅門敎にて觀る神と釋迦の本地なる大慈悲の彌陀とは其れに對する觀念同じからず。已前の神は民族を保護する神にして今彌陀は公明正大なる、大慈悲なる、平等一慈悲の下に一切衆生を攝取して凡てを釋迦佛と等しく成佛せしめんとの大慈父の彌陀を神格とす。故に彌陀は人格に現はれたる釋尊を宇宙大にしたる靈格なりとす。故に今宗敎として唯一の本尊たる神格を説くに釋尊の人格を通じて彌陀を顯はす。

釋尊は斯經に於ては唯一の靈格たる彌陀を現はすに垂跡たる法藏菩薩の因縁を以てす。本有法身の如來は絶對界に實在し萬徳圓滿して本來常然として不動なれども生死界に在る衆生の爲に應化身たる萬善萬行酬因感果の方便身を以て衆生を誘引し玉はずは衆生は本佛の光明に接すること能はず。往昔法藏の大願大行を立て、衆生の爲に大慈父の聖意を示したるも今現に釋尊を現じて慈

父の聖意を教へ給ふ同一の方便攝化の身なり。法藏成佛の方便身を通じて本覺の無量壽光王に接するも、釋迦を通じて無量壽王を見奉るも二途あるに非ず。法藏成佛の方便法身を通じて西方の淨土の彌陀と名づくも、今釋迦を通じて娑婆即寂光土の無量壽王と名づくるも實には同一の異名に外ならず。

本覺の法身は本有無作常住不動の大靈體にして又無盡の相好萬徳圓滿して常恒に一切衆生を攝化したまふの徳は本然として具備したまへども一度び慈父に背き生死の間に沈みし衆生の爲に方便法身なる萬善萬行一切の諸善波羅密を行して攝化したまふ酬因感果の身と現はれ給ふは是因果生死に囚はれたる衆生を度せん爲なり。

大宗教家としての佛陀

無量壽經即ち本佛彌陀慈父を此土の衆生に紹介する爲めに教主釋尊は彌陀三昧に入り玉ふた。三昧定中の釋尊の精神には娑婆一切の萬物は悉く隱没して絶對の靈界即ち彌陀大光明が現前す其釋尊の精神には宇宙全體が彌陀光明尊である。能觀の心も法界に偏照し所觀の彌陀も普ねく十方界を照して一體不二の靈體である。

彌陀は絶對界の太陽にて釋尊の心は淨滿月に例へらる。たこひ西に日は入りても其光は滿月皎々として照らして居る其彌陀の靈徳

に映して光耀赫々たる釋尊の姿は斯大會に示されて、經に曰く、爾時世尊諸根悅豫し姿色清淨にして光顏巍巍たり。尊者阿難佛の聖旨を承て即ち座より起つて徧袒右肩し長跪合掌して佛に曰して言さく、今日世尊諸根悅豫し姿色清淨にして光顏の巍巍たること明淨なる鏡の影表裏に暢るが如し。威容顯曜にして超絶し玉へること無量なり。未だ曾て殊妙なること今の如くなるをば瞻奉らざりき。唯然り大聖我心に念言すらく今日世尊奇特の法に住し今日世雄諸佛の所住に住し今日世眼導師の行に住し今日世英最勝の道に住し今日天尊如來の徳を行じ玉へり。去來現の佛、佛と佛と相念じ玉ふこと今の佛も諸佛を念じ玉ふこと無きことを得んや。何が故ぞ威神の光々たること乃ち爾るや。是に於て世尊阿難に告げて曰く云何ぞ阿難諸天汝に教へて來つて佛に問はしむるや、自ら慧見を以て威顏を問ふや。阿難佛に白さく諸天の來つて我に教ゆる者有ること無し。自ら所見を以て此義を問ひ上るのみ。佛の言はく善哉阿難。問ふ處甚だ快し深智慧を發して眞妙の辨才あり。衆生を愍念するを以て斯慧義を問へり。如來無盡の大悲を以て三界を矜哀し、所以に世に出興して光く道教を聞き群萌を拯はんと欲して恵むに眞實の利を以てす。無量億劫にも値ひ難く見難し。猶靈瑞華の時に乃出るが如し。今問ふ處は饒益する處多し。一切の諸天人民を開化す。

阿難當に知るべし。如來正覺其智量り難し。導御する所多し慧見無碍にして能く退絶すること無し。一餐の力を以て能く壽命を住むること億百千劫無數無量にして復此に過ぎたり。諸根悅豫して以て毀損せず。姿色不變にして光顏異なること無し。所以は何如。如來は定慧究暢して極り無し。一切の徳に於て自在を得たり。無量壽經の序文を掲げたり。斯聖文は釋尊が彌陀三昧中に彌陀の大靈と合致し彌陀の大日光が釋尊の滿月に反映したる靈相なることを明にす。初の世尊諸根悅豫姿色清淨光顏巍巍の三句は佛陀が三昧中彌陀の靈徳に反映し、靈體に感受し靈に充たされたる靈相にて之を三相とす。今日世尊奇特の法より天尊如來の徳を行ふに至る五句をば彌陀の内包の靈徳が釋尊の精神中の感覺と感情と知力と意志と及び身心の總體の感應顯現したる内徳にして之を五徳と云ふ。佛陀が身の三相と精神の五徳を以て彌陀と合致したる身心の萬徳を示して釋尊自ら模範となりて何人に拘はらず彌陀三昧に入つて彌陀の靈徳に感受し又靈化せらるゝ時は肉の我は轉じて靈我に復活し人格革新して全く光明中の生命となり靈的生活に入ることを得るの身と心との状態を示し玉へり。凡て大乘佛敎の序文は其經の内容を表明したまふ。釋尊經を説くに因縁を持つて説法したまふ。例せば觀經の如くは王舍城主沙

羅王の夫人韋提希が其太子阿闍世が調達の誘惑により逆意を起し爲に夫人は慘憺たる逆境に陥り天地間に寸隙なき苦悶の中に釋尊の慈悲を仰ぎ幽閉せられたる深宮に在りて世尊の哀憐を仰ぎ上るに世尊は其を哀み玉ひて靈山より韋提希の所に現じ玉ひて彌陀の大慈を開きて韋提希をして歡喜無生を悟らしめ凭る苦境の中に在て韋提希の心は靈的に復活して精神的に極樂に生せしめ玉へり。

今經は敎祖釋尊が一切衆生の大慈の父を知らしめ宗教的に一切を攝化せんとの聖意によりて自ら彌陀三昧に入り彌陀の大靈光に融合したる身と心との靈相を明し彌陀の萬徳の光明は三昧定中の釋尊に映現す。最圓滿に完成し最勝に研磨したる釋尊の明鏡に彌陀の靈光は反映しました其内容は彌陀に滿され自受用法樂を甘受し玉ふ。佛陀自ら範を示して一切の人々をして彌陀の光明に接觸し獲得して靈活せしめて最圓滿なる靈格に轉せしむるを期し給ふ。

三相と明淨鏡

爾時に世尊の諸根悅豫と姿色清淨と光顏巍巍々の三相は是淨界に嚴臨し玉ふ彌陀の靈徳の光が釋尊の精神に映現し彌陀の靈に充たされたる釋尊の内容が最も靈妙自受法樂の靈感極り無き歡喜妙樂天地に充滿し八面玲瓏たるを云ふ。因て言く彌陀の靈徳が諸根悅豫に現はれたりとは何に依りてか知るを得ん。今釋尊の悅豫して

姿色も清淨に現はれ玉ひしは全く彌陀の靈光の反映なりとは其證あり哉との問なり。答へて三相は全く彌陀の大日輪が釋迦に映寫したることは經に示されたり。即ち釋尊が阿難に云はしめ玉ふた。曰く今日世尊の實に諸根悅豫し姿色清淨にして光顏巍巍たること喻へば明淨なる鏡の影表裏に暢るが如しと。此文を以て證す。彌陀の靈光が釋尊の最も能く無量劫に於て精練鍊磨したる心の鏡に映寫せること本より彌陀の日光は常然と照し一切の處一切の時として徧照せざることも無きも此を映寫すべき身心の器を能く鍊磨せざるが故に現せざるのみ。

諸根悅豫は釋尊の精神腦髓神經より五官及び身體中の全部に渡りて最も能く生理官能及び機能よく完全に訓練精修して皮膚筋骨に至る迄器械的また機關的に調和能く宜しきを得て彌陀の靈徳を使用すべく。

姿色清淨は血液循環及び呼吸發聲等の能く調和を保ち、生理的化學的の調和の宜しきを得るが故に姿色清淨なり。三身心統一と目的の威力。身體の器械的の完全、血液循環呼吸等の調節作用の適順を要すると共に最終の要點は身心統一の威力なり。能く三昧禪定力を養ひ、腦髓神經機官と及び呼吸等の調節を順調にし身心を能く調へ最も大切なるは精神統一の威力なり。精神統一の練習は妄念及び雜想を排除し常に一定の目的に向つて注集し全心全力

を集めて金剛の如くに凝住せしめし時は非常に精神の威力を奮起す。此三相に於て脳髓神經及びすべての生理的機體及び機能は彌陀の法力萬徳を容納すべき器具、血液及び氣息等の調節作用は彌陀の靈力慈悲光明靈力の交感靈遇する機能、統一的威力は彌陀の威神三昧定力にして彌陀と我との最も鞏固なる金剛の統一を爲すに至る。此三相は人の身器を宗教的靈的器具として莊嚴すべきもの、此三相を説明せん。

一 諸根悦豫 佛の相好と三相

佛陀は應化の身三十二相を具して以て法身の衆徳の圓極を表はし八十種好を具して法身を莊嚴す。此相好は佛會てその相好百福の功徳を以て莊嚴す。相好と今の三相の相異なることは相好は骨相の如くにして無量功徳の積聚より形成せられたる結果にして生得の形態の相にて今の三相は血相の如く生活内容の活動現相なり。相好は骨相にて三相は血相の如し。相好は形態學的また解剖的にて三相は生理的、相好は固定的三相は變化的なり。殊に姿色は凡夫の姿色は外界の刺激に反應して忽ちに變化す。佛陀は諸根調節の精神偉大にして統一の威力強大にして何なる境遇にも變動せず。

三相五徳の古師の判釋

宗教は時機相應して行はるゝ故に經の判釋に於ても必ずしも古

今同一ならず。從來の超然教と今の圓具教との判釋大に異れり。古來の諸師諸根悦豫等の教祖の三相の判釋大槪是の如し。曰く如來は實に歡感無しと雖も本意を顯はす爲に悦喜の相を示現す。其故は釋尊の大悲偏に常没の衆生にあり。常没の衆生の出離は唯往生極樂の佛願にあり。今將さに出世の本懷なる彌陀の本願を宣説し衆生の往生を得ることを悦豫し玉ふ現相なりと。諸師の意多くは釋尊が彌陀往昔の本願を憶ひまた西方現在の彌陀の慈悲一切の凡夫を救濟し玉ふことを念じて釋尊悦豫の相を現し玉ふと解せり、夫れ或は然らん、然れども今吾人の主義は次の如くに悦豫等の相を釋す。

今現に釋尊三昧定中に彌陀の大慈悲及び萬徳が映現したる現相にして牟尼の淨滿月は正しく彌陀大日輪の光明反映の相なり。阿難が世尊に白して曰く今日世尊諸根悦豫し姿色清淨にして光顔巍巍たること明淨なる鏡の影表裏に暢るが如し。威容の顯耀にして超絶し玉へること無量なりと。是正しく釋尊三昧定中の心鏡に彌陀の大慈威神光明が映寫したる現相なりとす。教祖是の如くに範を示し、將來衆生の爲に念佛三昧を以て各自の心鏡を磨き彌陀の心光映現し諸根悦豫姿色清淨ならしめんが爲なり。また觀經に衆生三昧心に彌陀の顯現すべきを教へ自ら明鏡を取つて自ら面像を見るが如くせよと教へ玉ふも此類なり。

三昧の解

大乘佛敎は佛陀自ら三昧に入りて經驗し玉ふことを衆生に敎へて心の妙境界に證入せしむ。三昧とは等持定と釋し即ち心鏡明かに澄淨せる時對象物が影現して心と像と相合して不一不異の關係を以て現す。即ち行者の澄淨なる心鏡に如來の相好影現す。但し鏡には影像を映現するも衆生の信心の鏡には全く如來の相好とまた如來の心と合して不一不異の交渉を以て如來の靈徳に衆生の心性は靈化せらる。

諸根悅豫

釋尊は生得として三十二相具して骨相としても實に完全無缺の形體を備へてましまし其上に能く身體即ちすべての腦髓神經系統より筋骨皮肉一切の生理機體が充分に精練妙鍛能く五根等の機能を能く調練し陶冶し玉へり。宗敎家としての釋尊の靈體は即ち彌陀の靈徳を容納すべき聖體なり。彌陀の靈應を安置する靈器とすれば之を容納しました其靈徳を應用するに機關を完全に裝置せざるべからず。此身體器關をして彌陀の靈徳を活動すべきまた安置すべき器とすれば靈的活動に機關運轉の障礙と爲るものは除かざる

べからず。また能く調練せざる器は肉欲等の劣等の活動を爲すに便にして高等なる靈的活動の運動に未だ不適當なり。故に釋尊は自ら五根等の凡ての生理機能を能く調伏して動轉輕躁の舉動毫も在まさざりし故に釋尊の威儀尊嚴にして諸根寂靜端嚴なり。威儀を瞻仰する時は何人も敬伏せざるなし。

諸根調伏。佛陀は諸根能く調ひ威儀整然として世尊成道し玉ひて後牟枝隣陀龍王の地向ひ玉ふ道に於て一の道士に遇ふ。優波伽と云ふ。世尊の相好と及び諸根寂靜にましまし威儀端嚴なるを瞻て奇特の想を爲して頌て曰く世間諸の衆生は皆三毒の爲に縛せらる故に諸根輕躁にして外境に馳蕩す。然るに今仁者を見るに諸根極めて寂靜なり。必ず解脱地に到りたまふこと決定して疑ひなし。仁者其姓は何等ぞと。

釋尊の諸根能く整ひ寂靜にして輕躁ならざるは内五根を調整し調伏し練習し玉ふが故なり。

悅豫は是積極的に佛陀三昧に大自在の大自然受法樂即ち釋尊の五根等能く調伏し寂靜にして澄清神鑒なるは明鏡の影表裏に暢るが如し。之に加ふるに彌陀の法界に充滿せる大法樂無量三昧の妙、重々無盡不可説の内容の歡喜と法樂とが釋迦の心鏡に映現す其時の佛陀の内容には法界充滿の法樂を感じるが故に悅豫せざるを得ず。佛陀が彌陀三昧の内觀は即ち法界周觀にて法界は悉く蓮花藏

界重々無盡の大法樂が佛陀の内容に充滿する故に悅豫なり。若し凡夫の如くに心が五塵の外境に馳蕩して輕躁動轉すれば妄想妄念の波浪休まず、波浪止まざれば靈境顯現し難し。然るに佛陀の諸根寂靜不動なるが故に明鏡止水湛然として澄淨なり。

姿色清淨。諸根は身體の生理機能にて即ち器械的機關的の形體の完全を云。姿色は血液循環呼吸及び發聲等また凡て神經及び分泌液等の調節作用の練習薰習を以て調節して生理的精神作用を宗教活動に便利ならしむ爲に訓練するなり。佛陀は血液呼吸等態く調適にして生理的に宜しきを得る故に内的生活の調節が適する故に表現して姿色清淨皎潔なり。

是血相血色氣色是能く氣海丹田に氣を養ひ靈氣に充ち邪氣去り神氣玲瓏玉の如く佛陀が金色の靈氣色が常に身體を養ひ血液順調にして四大常に輕安に金色の靈色は外塵の爲め酸化して錆を生ぜず。宇宙最靈英氣の彌陀の心に養はる。

釋尊の金色なるは全體黄金は外氣の爲に酸化して錆を生ぜざる如く佛陀の精神の本質が純粹至真至善至美にして煩惱の如くに外塵に染汚されざる性なり。凡夫の心の本質は煩惱の垢質なれば鐵類の如し外塵に觸れて忽ちに貪欲瞋恚嫉忌等の諸の煩惱に汚さるる。佛陀は至善至真にして常に彌陀の大法樂歡喜妙樂に充滿さる故に何如なる境遇にも心の内容に變轉なき故に表現に於ても姿

色變じ玉はす。

釋尊或時に提婆達多阿闍世王と議りて佛陀及諸弟子を害せんと爲し佛及五百弟子を請じて城に入らば五百大象を醉はしめ之を踏殺さしめんと爲せし時に佛諸弟子と共に城内に入る。醉象鼻を鳴して前み牆壁を撞突し樹木を折敗ひ一城内戰慄す。五百羅漢空中に飛在す。獨り尊者阿難のみ邊にあり。醉象頭を齧して徑に前んで佛に趣く。時に佛大悲心が金色の光を放ちし和顔微笑して口より光明を放ち玉ふて五指より五獅子を顯はし同聲に俱に吼え天地を震動す。醉象地に伏して敢て頭を擧げずと。阿闍世王は曾て釋迦の最後の顔を欲して竊に隠れて其様を窺ふに醉象一同に獍狂惡佛に向ふ時に世尊威容顯赫にして微笑し玉ふを瞻みて闍王大に感動して奇異の想を起して佛に歸依せり。謂らく曾て歸依する處の提婆達多是意に逆ふ時は忽ち憤怒して色に表はる。今日釋尊を瞻るに斯の如き厄に臨んで還て和顔微笑したまふ如きは實に眞の神靈にあらすんば寧ぞ爰に到らんと。深く前非を悔ひて初めて佛世尊に歸依し上れりと。

佛祇園精舍に於て國王及び大臣等の數多の爲に說法し玉ふ時に外道等が佛陀に對する歸依を壞さんが爲に旃荼彌と云ふ妖婦が盂を繫て腹を大にし無慮百千の坐を分て、佛の説法したまふ高坐の側に立て誘て曰く、沙門よ我夫よ君何ぞ家事を顧みずして還て他

人の爲に説法し玉ふぞ。君何ぞ自ら楽しんで我苦を思はざる。曾て我と通じて我を娘ましめ今當に臨月に近けり。酥油を須めて小兒を養はん。盡く我に其資金を給せよと。衆威大に驚異の眼を注ぎて之を視る時に帝釋天護法の爲に化して一の鼠と作り其衣裏に入り孟繁を噛み斷りたれば忽ちに孟は地に落つ。時に世尊は毫も驚き玉はず。和顔光顔巍々として異るなく敢て恐り給はず又之を辯護し玉はざりき。如何なる場合にも姿色不變にして光容殊なることなし。時に會集成な外道等の中傷的の謀計甚だ憎むべきを責むれば外道等還て自ら根顏慚恥に勝えずして其座を起てりと。

佛陀靈山に經行したまふ時に提婆達多惡意を以て崖石を擧げて佛陀の御頭を擲ぐる。守護の山神手を以て石を捧げけるに石の小片迸つて世尊の脚に中たり拇指を破つて血出でつるに世尊は光顔常に倍して麗はしかりしと。

また舍衛國の流離王兵を起して釋種を伐つ。釋尊の一族咸く亡らる。時に阿難等の釋種の弟子等は非常に歎息すれども世尊は毫も歎じ玉はず。光顔異なることなし。阿難等は非常に歎息悲惱措くこと能はず。佛に白して白さく、世尊よ實に釋種が此厄難に罹る、世尊何ぞ悲嘆し玉はざる哉と。佛の言はく是過去世に羅闍城に捕魚の村あり。饑饉の爲に村の池中の魚類を捕へて之を食ふ。其報として今種子此難に遇へり。我は曾て先より此事を知れり故

に今更に歎かじと。世尊は何かなる境遇にも姿色變せず光顔異なること無しとまた惡意を以て向ふ提婆に對しても又羅闍羅に對しても常に感情平にして異なること無しと。

機體の鍛練

佛陀は太子たりし時宮中に在りて婦女に傅かれし身なれば縱令精神的にこそいかなる惡魔外道凶惡の輩に對しても之を摧破する靈力を有するとしても身體は宮中色味の間に保養せられし蒲柳の體質は逆も寒熱等の自然に對し骨筋の鍛練は如何と云ふに、佛陀は王宮を出で、山に入り修行し玉ふには苦行外道にも過ぎたる體苦の苦行をも敢行し風雨寒熱にも能く忍耐し得る精練をしたまへり。

或人曰く釋尊の如く大靈の質何ぞ大悟徹底に六年の長時間を要すべき。恐らく五六ヶ月にして大悟せしならんと。然り然りと雖も唯心靈的に悟道すべきならば然らんも身心共に完全に薰習鍛練せんには六七年を要すべし。人の身體の細胞組織は七年にして骨髓に至るまで一變すと。さすれば全く身心共に充分に薰練せんには七ヶ年を要すべし。釋尊の生理機體より乃至血液循環呼吸及び分泌に至るまで身心生活の全部を完全に練習して始めて天人師と爲つて大千界を震動し一切衆生の導師たるを得たり。

光顔巍々。此表現は釋尊の身心統一機關たる腦髓神經全部に亘りて統一し調整し此身心を全く宗教的機關に適當し自由自在に彌陀の靈徳を應用すべき靈器なり。喩へば世の蒸氣機關の如きも其器械的の装置より機關の構成等が最も巧妙に最も完全に成りたる器が其最も巧妙なる技師の手に依て操縦する時は其業に於て成績が完き如く也。

釋尊の光顔巍々は身心統一して全く彌陀と釋尊の所能一致完全たる金剛の如きの状態なり。小乗教の釋尊は禪定を以て精神を統一し一切の妄想雜念なし、世尊の精神を統一し禪定力の深講することば經に世尊成道して後に道の側に在りて暫く靜慮し玉ふに數多の商人が五百乘の馬車に貨物を載せて通行す。その音の轟々たる甚しきも世尊は（以下断章）

諸根悦豫 佛陀は實には常然に三昧にあり五欲を調整し寂靜坦然として澄明なり。其寂靜澄坦たる釋尊の心に彌陀大日輪の赫々たる靈應の反映するや釋尊の全心は全く彌陀に映じて充滿す。其の内的状態は言語の能く説明の及ばざる處、暫く内容の靈感を願せば、

彌陀の慈愛は永しへに天と地とに充ち満てり、牟尼の聖胸に融合ふて悦極りなかりけり。

慈悲に満てる彌陀の面朝日まばゆく輝ける靈き姿を想ほへば悦

豫極まりなかりけり。念佛三摩耶に心澄み慈悲の聖旨に融合うて神秘不思議の靈感は神悦極みなかりけり。

我み佛の慈悲の面朝日の影に映ろひて照るみすがたを想ほへば靈感極りなかりけり。

寂靜にして澄みたふ牟尼の聖胸の極みなく彌陀の慈悲に融合ふて法樂極みなかりけり。

姿色清淨。釋尊の調節作用は三昧の修養能く純熟して全く彌陀の清淨光に血液も呼吸も又稱譽讚嘆の色にまでも彌陀の靈に感應して血も呼吸も凡ての調節作用までも清淨澄潔として表裏に暢ふる如くなるなり。そは表情に現して姿色清淨となる。願に、

譬へば西に日は入るも光は月に映る如く無量壽王の日光は牟尼満月に輝けり。

まばゆく照す朝日影金剛石に映ゆる如く彌陀光王のみ光は牟尼の姿色に照りとほる。

譬へば明淨なる鏡影は表裏に暢ること、彌陀の光に映える牟尼の姿のまよらけし。

無量光の日は三摩耶の窓を照します、牟尼の金のみすがたに映ろひて清らけし。

循る血しほもつく息もいと清けくうつろひて、みだのみむねに

きよめられ姿色はことに清らけし。

光顔巍々。三昧的に妄想雜念が驅除し精神統一し至純至精の金剛力が佛陀の靈體に顯現す。無限の大威力が即ち無限發電所より釋尊の身に實現して光顔巍々と現はれ其大威神は大千界に展轉して一切衆生に感傳して悉く一大靈の本に一切を攝取せんとの威徳神靈不可思議也。頌に。

彌陀の威神の極なきは牟尼の聖道に展轉し一切衆生に感傳し威神極りなかりけり。

萬の山にたちこえて須彌の峯はそびへたり、彌陀の威神の極なきは牟尼の威神にうつろへり。

日月魔尼の光さへ隠れて墨の如くなる、彌陀の威神に映るへる牟尼の威嚴ぞいかめしき。

我等如何に三相を成就せん

教祖世尊は自ら教主として念佛三昧に彌陀と合致し彌陀の靈に同化し靈徳を成就して人格の彌陀として我等に模範を示し玉ふ。我等は教祖の範に則り全く此身器は彌陀の靈應を容納すべき靈器彌陀の靈能を被りて運轉すべき機關なり。此器械的機關をいかに調練して全く彌陀の器と爲すことを得べき。此身心は生理的機關にして精神は運動の技師なり。

四八

四九

身器に就て釋尊は三相を示し玉ふ。(一) 諸根の生理機體及官能機能の鍛練、(二) 姿色清淨。血行呼吸神經分泌液の調節作用の調節、(三) 光顔巍々。生理及精神の統一と威神力の修養。彌陀の器具となり、身機の調練陶冶にて此三面何も缺くべからざる要件なり。

初めに諸根の鍛練

諸根とは眼耳鼻舌身の五根即ち此生理機體全部を能く鍛練して全く彌陀の靈徳を活動すべき器械に耐ゆるに資すべきなり。此身器は本法身ビルシヤナの分子として、實に無數の細胞より成立つて而して人類に至つては最も巧妙に構成せられ報身の靈能に靈化せられ開發し靈化せらるれば全く如來の聖意を實現すべき器として賦與せられたるの觀あり。楞嚴經には我等が此五根の身を構成すべき五大元素も本如來藏妙真如性の顯現にして又眼耳鼻舌の官能もすべての生理機能も實は妙真如性の因縁作用から現じたので宗教的に云はば我等が五官の働さも又全體に亘る生理的の働かが出来るのも皆如來法身から顯現したので實に妙々不思議に構成せられて居る。

彌陀の靈應の器具なる我等が身器は實に靈を容れ靈能の活動すべきに巧妙に構成せられたり。眼耳鼻舌等の諸の器官が能く整列して内部の消化器循環器排泄器も機能も互に能く調和を得て生命を保存し靈の器具たるに資すべき器官がキチンと配列して居る之

五〇

五一

を體制と云ふ。實に此の體制は複雑にして諸の機能の分業が相互に自己の業を司り互に扶け傳達等の具合ひも能く巧みに構成されて居る。諸根即ち眼耳等の感覺の器官や運動の器官などが外界の刺激を傳達して中樞に通知す。此の諸の器官を關聯させる作用は神經系統である。表面に現はれたる眼や耳等が内部に關係する神經は部分に分れたれども其全體を神經系統とす。諸根に悅豫を呈すべき根の活動の根底たる神經系統の事に就て累説せば神經が外界の刺激を掌る一の器官を神經中樞とす。其系統を組織する單位を神經原と曰ふ。神經原は細胞と纖維とにて細胞は其内に核を有する原質にて纖維は細胞の突起である。神經原には互に官能の聯絡ありて而して興奮の働をなす。神經系には中樞と傳達道とあり。神經中樞を大體に於て四分に分つ。一大腦、二小腦、三延髓、四脊髄、である。是に皮質下と四疊髓を加ふれば六部なり。初め大腦は頭の中樞正中線の左右兩半に分ち内部の表面は灰白色にて内部は白色なり即ち是皮質と白質となり。皮質の方は細胞の生成分にて白質の方は纖維の聚合なり。大腦の表は蜿蜒迂曲して皺襞を有す。即ち廻轉なり。小腦は大腦の後下部に位し矢張左右兩半あり。蟲と云ふ部分が聯絡して居る。延髓は小腦の下にして菱形の陷凹あり。脊髄は延髓に連なり表面は白質にて内部は灰白質なり。灰白質は神經細胞及び軸索纖維の聚合する處である。白質は灰白

質を包擁して上下に走行する軸索纖維の聚まる處なり。傳達道は未稍神經傳達道と中樞神經傳達道との二に區分す。求心性と遠心性となり。前者は感覺神經にて視る聽く等の刺激が神經を興奮して中樞に傳達する働をなす。遠心性傳達は即ち運動神經にして中樞内の興奮を身體各部に傳達する働をなす。未稍傳達道を腦神經と脊髄神經とに分つ。腦神經に十二對あり。嗅視動脈滑車三叉外旋額面聽舌咽逃走副脊舌下等の神經なり。此等は頭部及び顔面の感覺と運動とを掌り何分かは内臟にも分布して居る。脊髄神經は脊髄の中樞と身體外周部とを聯絡する傳達道にて此に又求心性と遠心性とあり。求心性は身體外周部の神經の興奮を中樞に傳達して感覺せしめ遠心性は中樞の神經興奮を脊髄を経て身體外周部の筋に傳へて運動を起さしむ。中樞神經傳達道とは又聯合纖維とも云ふ。中樞神經相互の神經興奮を傳達する纖維より成る。根即ち眼耳等の官能の感覺は外界の刺激を受けて之を大脳皮質に傳達して反射作用から意識と爲る。運動平衡有機等の感覺なり。吾人の視聽等の諸根の感覺作用を起さすには實に巧妙なる解剖的の器械的装置と複雑極りなき構成より成立つて居る。神經系統を始め榮養機能循環機能等の一切の系統より成立つたる諸根の機體なり。

大脳が有般精神機能の主府にして思慮認識觀念等も皆此より出

づ。故に此部が完全なれば精神作用また完全なり。實に複雑極りなき器械的作用が内外の刺激と併行す。

釋尊の頂骨廷突して無見頂相の突出したるは即ち神聖不可犯の威神とまた一切種智の存する表現なり。

實に我等も本法身如來藏性から隨縁の顯現なる小器械の身即ち頓て如來無量功德の靈性を容納しまた彌陀の器具と爲るべき機關なり。之を生理學者の説に依れば人間の生理的組織の元素は水、

炭、酸、窒、鹽、磷、鐵、硫黃、ナトリウム、カリウム、カル

シウム、マグネシウム、沃度、等の化學的成分より成れる體質にて此生體が本質は無數の細胞の集合體なり。實に四百兆の細胞

より成立て生理學者云ふ如くは生命の單位なる一々の細胞が悉く生きて居る。而して其の細胞の原形質の分子の微なることは二千

五百萬倍の顯微鏡にて初めて認めらるる。一の元形質に二百萬の分子を以て成り、其一分子は八百八十二個の元素を有し一原子に

は又數多の電子を以て成立つて居ると。斯の如き無數の生命團體が最も精妙に構造する身體にて最も靈妙不思議なる精神の作用あり。

是が法身如來藏の分身たる各個の精神の秘奥を開きて絶對大靈と合一し交渉せんには諸根悅豫の妙姿を現するなり。

昭和八年十一月二十五日 印刷
昭和八年十一月二十八日 發行

(誌代年壹圓)

編輯兼 發行人 山崎 辨成
小石川區關口町六十五番地

印刷人 小林 七太郎
小石川區關口町六十五番地

印刷所 靜文社印刷所
電話牛込五四一九番

東京市小石川區水道端二丁目四十四番地

ミオヤのひかり社
振替口座東京六八五一番